news
長良川市民学習会ニュース

徳山ダム運用 10 年、導水路「凍結」9 年

長良川に徳山ダムの水は要らない

徳山ダム湖

長良古津：導水路放水地点

No.28
2018 年 12 月 27 日

巻頭言 ・・・・・・・・・・・・・・2
活動報告 ・・・・・・・・・・・・・2
赤須賀のヤマトシジミは今 ・・・7
高潮被害と河口堰の話を聞く・・・・・・9
事務局から ・・・・・・・・・・・・・・10
参加団体紹介・ご参加ください！・・・・12

長良川を放射能で汚してはならない！私たちは、原発の再稼働に反対します。

巻頭言：長良川と地域科学部（岐阜大学）

長良川市民学習会代表　粕谷志郎

皆様、今年はいかがだったでしょうか。よみがえれ長良川実行委員会として、例年の行事に加え、メディアコスモス「みんなの森に大集合」、石木ダムの映画会、桑名で、シジミや伊勢湾台風の時の高潮の状況を聞く会、導水路事業現場調査ツアー、命の水を守る講演と映画会などを行い、盛りだくさんの年となったように思います。何より、導水路が動いてないことに安堵です。

ところで、この年の瀬に岐阜大学地域科学部が廃部になるとの報道が飛び込んで来ました。中日新聞の報道によると、2021 年 3 月で学生の募集を停止する方針です。私自身はこの学部の元職で、河口堰に関連するユスリカなどの生態系の変化を調査してきました。本会副代表の富樫幸一教授は過大な水需要予測の問題を提起してきました。長良川河口堰も、徳山ダムも、導水路も無用ということです。生物学の向井貴彦准教授は魚類の生態系が専門で、長良川の魚類についても詳しく調査してこられました。岐阜市の準絶滅危惧種に鮎が加わったことはその成果の一部として反響を呼びました。さらに日本魚類学会は公式に河口堰の開門調査を支持しました。これらの研究は、反対のためのものではありません。長良川の現状と経時的変化を科学的に把握するものです。本会はこうした学問成果に依拠した活動を行ってきています。私の個人的な感想ではありますが、学内ではなかなか融合しなかったそれぞれの分野が長良川市民学習会の活動の中で見事に融合し、花開いたように思います。新しい地域科学が、民間の組織と一緒になって出来上がった瞬間だと自負しております。地域科学部の卒業生は多様な分野に就職していきました。就職率も、不景気の時代でも学内で 1．2 を争う高いレベルでした。廃部の理由は何も見当たりません。廃部の代わりに作るという経営学部の必要性も、教育スタッフの配置も曖昧なままです。地域科学部の廃部ありきと思われます。地域と共に作り上げてゆく学問の拒否という強権が働いているようです。岐阜大学の広報（kohositu@gifu-u.ac.jp）に声を届けたり、学生の立ち上げたサイト https://forestgifu-mirai.qloba.com　にアクセスするなど、ご支援いただければ幸いです。

情勢と活動報告

長良川市民学習会事務局長　武藤 仁

徳山ダムと導水路事業の経過

1973（昭 48）徳山ダム建設事業の決定
1995（平 7）長良川河口堰運用開始
2007（平 19）8 月「導水路事業計画」三県一市合意
12 月「長良川市民学習会」発足
2008（平 20）5 月徳山ダム運用開始
河村名古屋市長「導水路撤退」を表明
2009（平 21）10 月前原国交大臣導水路「凍結」表明
2010（平 22）12 月導水路事業の関係地方公共団体からなる「検討の場」が始まる

2007 年 12 月 17 日「長良川に徳山ダムの水は要らない！」と声を上げ、当会を発足させてから 11 年が過ぎました。導水路は１ｍの工事もされることなく、着工を許してはいませんが、事業「凍結」状態が続き中止させるまでに至っていません。

今年６月 26 日に開催された木曽川水系流域委員会では、本事業について「平成３１年度以降も新たな段階に入らずに水理水文調査等の環境調査を継続しつつ、引き続きダム事業の検証にかかる検討をするものとする」こ

と了承しているように、だらだらと「調査費」などの名で２億円を超える税金を垂れ流し続けようとしています。私たちは、よみがえれ長良川実行委員会の仲間とともに、事業の必要性を糾す「徳山ダム運用 10 年！導水路凍結 9 年！」現地見学ツアーを行いました。

2018/10/16 朝日新聞

第3種郵便物認可

揺らぐ利水の必要性

徳山はいま

ダム完成から10年 下

「徳山ダムが(下流の)横山ダムと連携し、50㌢水位を下げました」。名古屋市で4日に開かれた木曽川水系流域委員会。国土交通省の担当者が強調したのは、7月の豪雨で徳山ダムがみせた治水効果だ。流入する水を一時全量ため込み、揖斐川下流の負担を減らした。

徳山ダムは治水、利水、発電の多目的ダム。当初は毎秒15㌧を愛知、岐阜両県や名古屋市の都市用水に供給するはずだったが、長い工事期間のうちに水余りに直面し、最終的に6・6㌧に縮小された。代わりに洪水対策などの容量を増やし、治水効果が上がったという。

一方、この7月豪雨では長良川の支流・津保川があふれ、岐阜県関市上之保で2人死傷、全半壊約100戸の被害が出た。現地では9月末も家屋がブルーシートで覆われ、畳を上げて修理中だった。車が流された自営業男性(62)は「早く川を浚渫して安全にしてほしい」。家のすぐ裏の津保川は近くで別の川と合流しているうえ、下流約100㌔でカーブし、砂がたまりやすいという。

岐阜県も付近の危険性を認めており、緊急対策が必要な県管理河川（265㌔）にこの地区の津保川を挙げている。だが2023年までに完成を目指す50㌔には含めておらず、着手はその先の予定だった。

「限られた予算。選ばざるをえない」。県の担当者は苦しげだ。県の今年度の治水予算は124億円。国の事業抑制に加え、06年に表面化した県財政危機から、予算は20年前の4分の1まで減らされている。

導水路事業の検証進まず

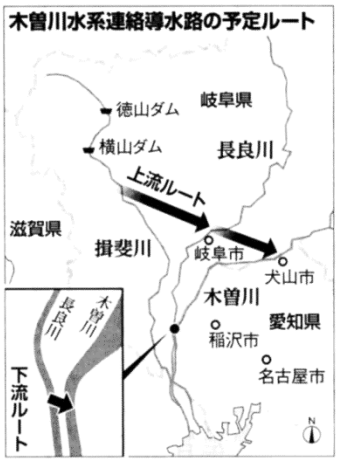
利水の必要性が下がっているなか、岐阜県はダムの完成後23年かけて利水負担金約400億円を水資源機構に払う契約を結んでおり、あと240億円残っている。本来は西濃地方の市町や企業に水を売って返済するはずだったが、地下水が豊富で一滴も売れず、一般会計から払う。利子や治水分なども合わせ、県の負担は年30億円を超える。

徳山ダムの利水関連事業はまだ続いている。国の木曽川水系連絡導水路事業（890億円）だ。ダムでためた揖斐川の水を、愛知県や名古屋市が取水施設をもつ木曽川や長良川に流す。渇水時は水を流せば環境改善にもなるといい、上流ルートの途中で一部を長良川に落とし、下流ルートでまた木曽川へ流す。

だが節水の定着などで、愛知県や名古屋市の水需要は横ばいから減少傾向だ。ピークの1975年に124万㌧あった名古屋市の1日最大給水量は昨年、83万㌧にまで減った。「100年に一度の大渇水」と言われ、各地で断水騒ぎのあった94年8月レベルだ。

長良川への放流も、むしろダムの冷たい水を入れることで「アユの成育などに影響するのでは」などという根強い疑問があり、市民グループが独自に毎月、水質計測を続けている。

民主党政権時代の2009年、全国のダム検証の対象に導水路事業が入り、公開の場で費用対効果などを調べることになった。名古屋市の河村たかし市長は導水路に批判的で、15日も記者の質問に「利水で要るというなら具体的に(国に)証明してもらわないかん」と話した。国交省も簡単に継続の結論を出しにくく、この3年間、会議が開かれていない。全国83の検証事業のうち、いまだ「検証中」は導水路など四つだけになった。（編集委員・伊藤智章）



導水路計画に反対し、放流予定地付近で水質計測を続ける市民＝岐阜市長良古津の長良川

＊度重なる豪雨と台風に見舞われ、今シーズンの鵜飼船運行中止は全 157 日中、過去最悪の 42 日にのぼり観覧船事務所を運営する岐阜市も深刻な事態に苦慮している。

気をとり直して、一路徳山ダムに向かいました。バスの中では、配布した資料にそって事務局（武藤、近藤）から導水路事業と徳山ダムについての説明をしました。事業の「凍結」が長引く中で、多くのことが忘れられています。事業の「おさらい」と検証です。

まず導水路の事業の目的は何であったのか？

①　異常渇水時の緊急水の補給

木曽川水系の異常渇水時に、徳山ダムの渇水対策 容量のうち 4,000 万㎥の水を木曽川及び長良川に 導水し、河川環境の改善を行う。

②　新規利水の供給

徳山ダムで確保される愛知県及び名古屋市の都市用水を最大 4.0 ㎥/s 導水し、木曽川で取水を可能にする。

10/6 徳山ダム・導水路現地見学ツアー

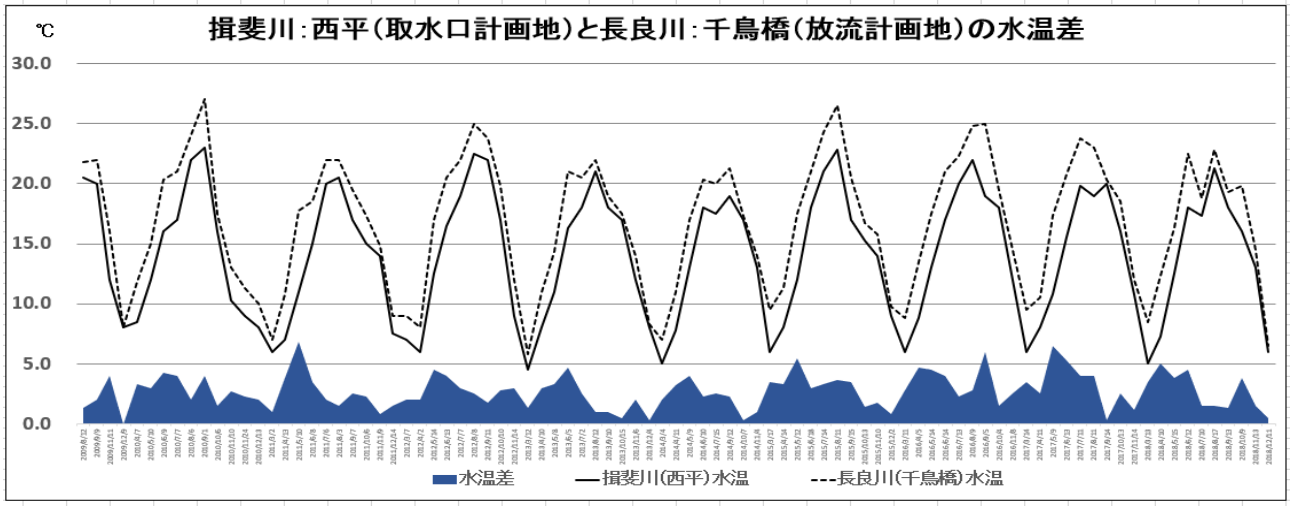
10 月 6 日（土）台風の影響で朝からの雨にもかかわらずバス定員 40 名のいっぱいの市民が参加しました。遠くは千葉県、三重県からも参加がありました。

水源となる徳山ダムから導水路の取水口となる西平、次に長良川への放水口となる長良古津までのルートを辿り、夜は鵜飼を観覧する企画です。

出発するとまもなく鵜飼観覧事務所から「今晩は強風が予想されるので鵜飼は中止」との連絡が入り、夜の部の鵜飼観覧を期待していた参加者はがっかり。

①について、異常渇水（10 年に一度起きる程度の渇水ではなく、1994 年渇水のようなきわめて希な渇水）時の環境改善と言われていますが、国か導水の必要性の基準としている「木曽川てのヤマトシシミの生息」の根拠は導水路裁判ても明らかにされませんてした。「長良川では鮎の生息」を基準に持ち出していますが、これも根拠に疑問があります。私たちが求めた専門家による公開討論も無視したままです。

それどころか、西平から取り入れられた冷たい水が、長良川の鵜飼場の直上流に放流されることを考えると鮎などに与える悪影響が心配されます。異常渇水時+に流されるのですから長良川は約４割の水が冷たい徳山ダムの水となり、川底を這って流れる異常な状況となります。

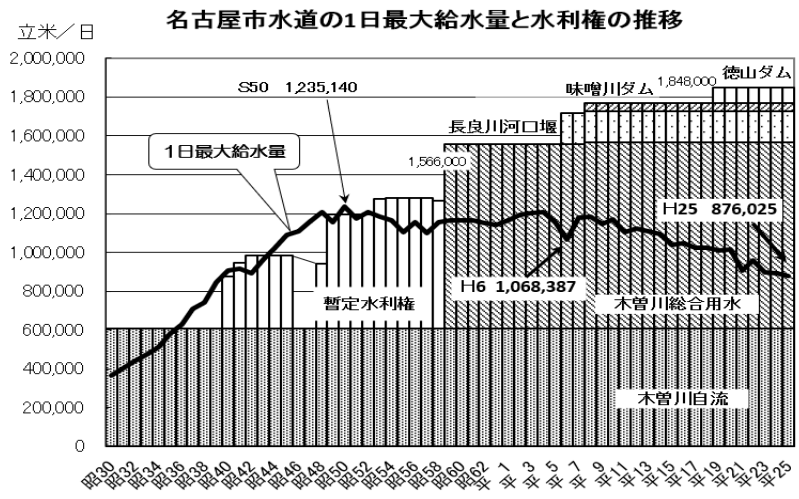


上のグラフは、私たちが９年間毎月（道路凍結の１，２月は除く）、西平と長良古津で測定した水温結果です。春夏秋冬いつでも西平の水温が低いのです。水温差が５℃以上のときもあります。長良川に放水されれば環境悪化することは容易に想像できます。

写真左：風雨が強く、車中から西平取水口を説明する粕谷豊樹さん。粕谷さんは毎月岐阜市の自宅からここまで来て水質測定をしている。地元のお母ちゃんたちとはすっかり顔なじみになり、地元の情報も掴んでいる。
写真右：西平ダム湖をまたぐ揖斐峡大橋。この橋からロープでバケツを下ろし採水している（私たちが測定を始めた後、事業者側もここで測定を開始した）。

②について、都市用水の需要が減る中で新規利水の確保は全く必要ありません。

名古屋市上水道は徳山ダムで開発した水量 1.0ｍ^3/秒（1 日約 8 万ｍ^3）を導水路を使って確保しようという計画ですが、右のグラフでも明らかなように需要は減り続けています。今日では１日最大給水量は 80 万ｍ^{3}台まで減っています（最大限節水した平成 6 年よりも少ない！）。徳山ダムどころか河口堰の水も全く要りません。



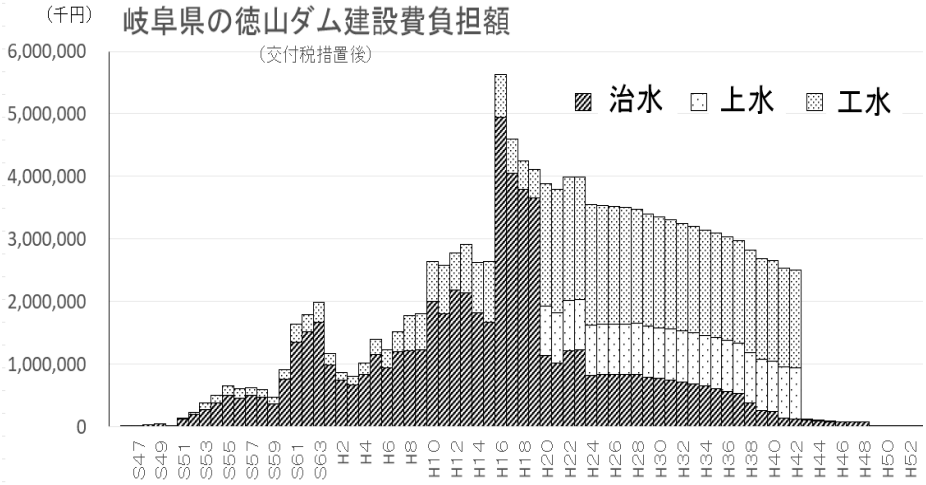
運用 10 年の徳山ダムの今

それでは導水路の水源となる徳山ダムは、運用されて 10 年たちますがどうなっているのでしょう。

利水（上水、工水）には一滴も使われていません。導水路が建設されていませんから愛知県と名古屋市は使うことはできません。水需要が減る中、使う必要もありません。

岐阜県はどうでしょう？

岐阜県には徳山ダム開発水の給水計画すらありません。

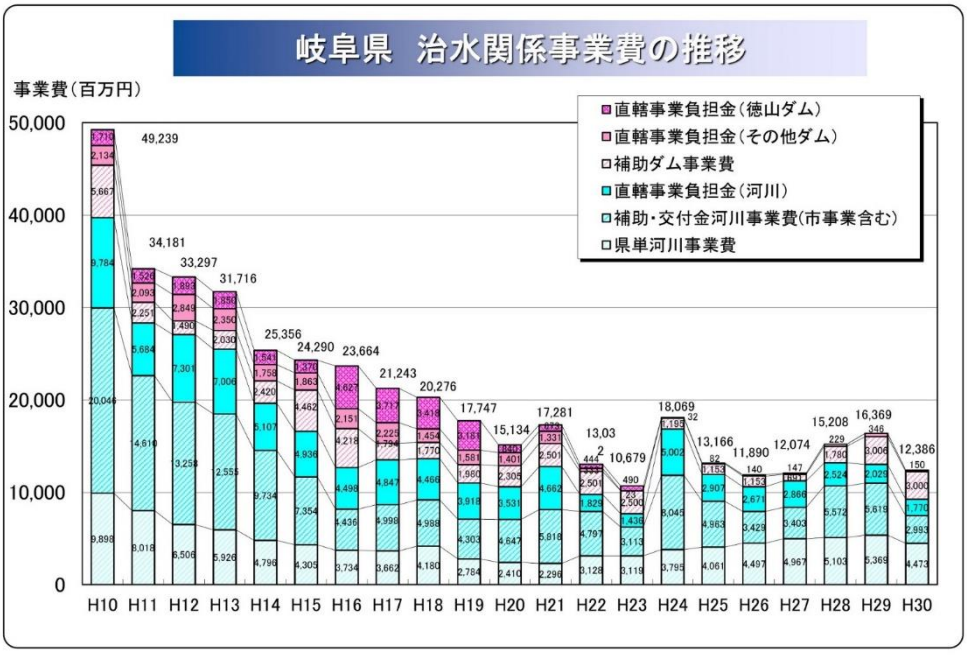


ですから岐阜県は、徳山ダム建設費負担金の水資源機構への支払い（建設費償還及び維持管理費※）をすべて一般会計からの直払いで行っています（地方財政法６条違反。他に類例はない）。

徳山ダム運用開始を機に「県土整備部河川課徳山ダム係」は「都市建設部水資源課徳山ダム係」となりました。やっていることは「水資源機構へ支払い」と「山林公有地化」に関しての水機構との連絡・折衝です。

平成 10 年（1998 年）あたりは、バブル崩壊による景気低迷に対して「公共事業による景気浮揚策」がとられ、とりわけ岐阜県では、「公共事業（ハコモノ建設を含む）大盤振る舞い」が行われました。当然ながら財政は悪化し、結局は「治水関係事業費」は急速に圧縮されることとなりました。徳山ダム事業費大幅増額の 2004 年（H16 年）にも全体額は増えず、他の治水事業費を削減して（※）徳山ダム建設費負担金に充てられました。

「徳山ダム係」を河川課から切り離したことで、「徳山ダム建設費負担金の支払いが、治水関係事業費を圧迫している」因果関係は直接的には存在しません（ことになっている）。しかし、徳山ダムが、中部電力の発電を除けば事実上の「治水専用ダム」と化けている以上、さまざまな形で「関係している」と見ざるをえません。



※H10～H29は最終。H30は県予算ベース

※ この年、国は、元の予算にはなかった増額分を補填するために、深刻な被害が多発している揖斐川支川杭瀬川の派川である「大谷川・荒崎地区」の対策に関係する費用を削って「移用」した。

岐阜県のダム以外の治水対策は遅々として進んでいません。右の新聞記事の「要整備河川 265ｋｍ」という数字は、昨年の北九州豪雨などを受けて見直して出した数字。この 265ｋｍ分の「要整備河川」はどのくらいのペースで対応していくのだろうか？

平成 26 年策定の「岐阜県新五流総」（県内の主な流域である長良川、揖斐川、木曽・飛騨川、土岐川、宮川の五流域において、中長期的なビジョンにたった総合的な治水プラン）ペースは「今後 10 年（H26～H35）で緊急性の高い 50ｋｍを整備」です。かけ離れています。

岐阜県 終了まで膨大な予算

要整備河川265キロ分

決壊対策 急ぐ自治体

西日本豪雨では多くの河川で堤防が決壊した。中部地方でも護岸工事などの対策が進んではいるが、自治体関係者は、激化する豪雨災害への危機感を強めている。

豪雨により、津保川からあふれ出した濁流が幹線道路に流れ込んだ＝8日、岐阜県関市神野で

岐阜県では今回、堤防決壊はなかったが、関市の津保川などで越水し、長良川の数カ所でも氾濫危険水位を超えた。郡上市では、堤防の建設予定地から一㍍足らずの地点で危険水位に到達した。

県は過去の台風被害などを受け、二〇一三年度に県管理の河川三千㌔のうち、対策が必要な箇所の二百六十五㌔分をリストアップしたが、対応を終えるまでには長い年月と膨大な予算がかかる。担当者は「早く整備を進めないと」と焦りを口にする。

国内最大の海抜ゼロメートル地帯がある愛知県は、川の流れに対して高さや大きさが不足していたり、過去に漏水があったりした堤防を「重要水防箇所」と位置付ける。決壊を防ぐため、洪水時には消防団が土のうを積むなどの作業に当たるほか、職員が年に一度歩いて点検。場所はホームページなどで公表している。

三重県内では昨秋の台風21号で、想定以上の雨水が流入して河川があふれ、伊勢市を中心に二千棟が浸水する被害が出た。これを受けて県は一八年度、十八河川で堤防を強化したり、川底の土砂を撤去して深くしたりするなどの改修に乗り出している。

ただ、県が対策を強化しているのは住宅地に近い比較的、大規模な河川に限られる。担当者は「今回の豪雨のような降り方は、河川改修では対応できない。いち早く避難してもらうしかない」と話した。

2018.7.14
中日新聞

徳山ダムの罪は建設にとどまりません。維持管理の問題です。平成 26 年度を例にとると年間維持管理費総額は 11 億 5,767 万円です。その内、岐阜県負担は 2 億 4,247 万円です。県民は一滴の水も使う予定がないのに、次世代にその負担を、将来延々と押しつけるのです。

徳山ダム問題は何も終わっていません。これから矛盾は拡大するばかりですが、しかし、私たちが今すぐにやらなければならないのは、徳山ダム導水路事業を中止させることだと思います。

ツアー参加者のアンケートから

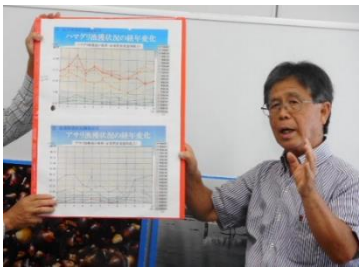
・バスの中でのレクチャー、ほとんど素人の私にもよくわかる説明でした。徳山会館で見たビデオ。ダムの下のたくさんの人々の生活を見て、“このままではいけなかったのかなー”との思いを持ちました。
・徳山ダムに沈んだ徳山村の写真を見て、大きな犠牲を払ってできたダムがほとんど無意味なものであったことがよくわかりました。長年水質調査を続けてこられたことは大変だったと思います。地道な運動ですが成果があるように広げていってください。
・取水口からそれほど離れていない、導水路が計画されている途中の道路脇にトンネル工事用の機材を作る工場があり、その規模が前に見たよりも大きくなっていたことに驚いた。
・決めたらムダでもやるのが国の姿勢のようです。凍結ではなく中止まで、何らかの形で運動をしていくことが大切かなーと思いました。
・この計画のムダなことを市民、県民に知らせることが最重要点だと思います。岐阜市は地下水を利用しているだけに導水路の影響を大きく受けることを今後訴えていくことが重要だと思いました。
・改めて学習活動が必要なことを思いました。この事業が不必要なこと、税金や水道料金に知らないうちに転嫁されていることを県民に知らせ、自治体に働きかける必要がある。

長良川河口「桑名」でお話しを聞く会　報告

９月２３日に赤須賀のはまぐりプラザ会館で「長良川河口・桑名でお話しを聞く会」を行いました。当初７月８日に予定していましたが、豪雨で延期されたものです。「しじみプロジェクト・桑名」の伊藤研司さんからシジミ漁の現状を、長島町で伊勢湾台風時に高潮被害に遭われ、河口堰建設差し止め訴訟で原告側の証人をされた加藤良雄さんから体験をお聞きし、その後自宅の防災施設を見学しました。赤須賀ではセリの見学を予定していましたが、この日は彼岸の中日のため休業で残念ながら見学はできませんでした。

赤須賀のヤマトシジミは今　－　長良川の漁獲量激減、木曽川・揖斐川でも

伊藤研司さん（桑名市会議員）は漁協の有志の協力を得て、堰閉鎖の一年程前の 1994 年 3 月から 140 回以上シジミ調査をしてきました。当時は既に河口堰建設地点周辺では浚渫が行われていたため、調査は約 10 キロ上流の浚渫前のマウンド周辺。調査方法はシジミ船で約２分間、鋤簾（じょれん）で漁を行い、湿重量約５キロをサンプルとして取り出し、ヤマトシジミ・マシジミ・死貝・ゴミに分類するものです。示された資料写真によれば、ゲート閉鎖前はかなり漁獲されていたことがわかります。見せていただいた保存されている当時のマウンド周辺の砂はさらさらしていました。



それが次第にシジミの重量・数が減り、死貝やゴミが増え、数年でほぼゼロに。堰を閉鎖しても淡水域に生息するマシジミは獲れると言われていましたが今ではそれもゼロ。

【１９９５年（H7）５月６日】
堰閉鎖直後ヤマトしじみ
重量 3960ｇ　個数 3490個
死貝：重量 70ｇ
ゴミ：重量 590ｇ

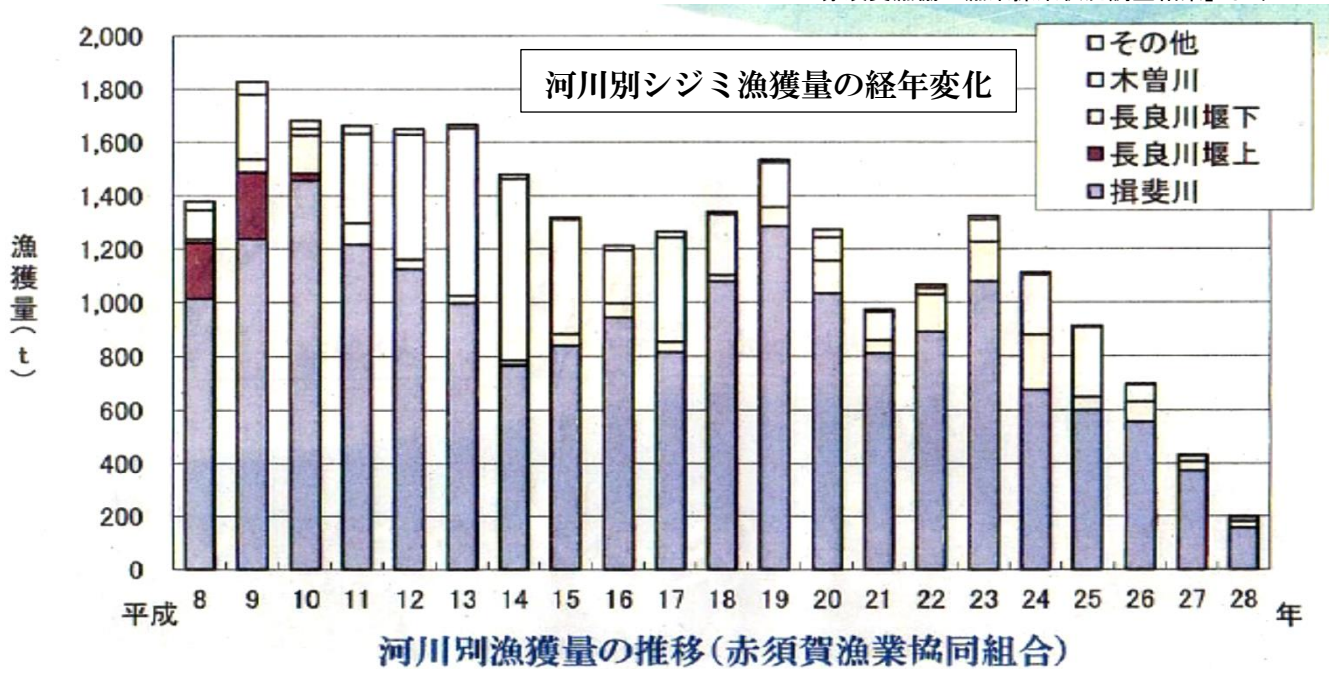
【１９９９年（H11）４月３０日】
堰閉鎖４年目ヤマトしじみ
重量 0ｇ　個数 0個
マしじみ
重量 500ｇ　個数 112個
死貝：重量 0ｇ
ゴミ：重量 4400ｇ
２分間の漁での総重量は約 7400g

漁師さんたちは資源保護のため、徹底した出漁制限・漁獲規制をして漁をしてきましたが、長良川での漁獲は壊滅状態になり、やむなく隣の木曽川、揖斐川で操業してきました。その木曽川では H26 年以降、揖斐川でも 27 年以降に減少が著しくなっています（次ページのグラフ参照）。揖斐川では砂地であった川底が変化し砂利が多くなっているそうです。H20 年（2008）に完成した揖斐川上流の徳山ダム建設の影響ではないか、餌となる有機物がダムのために流れてこないからではと年配の漁師さんは言っておられるそうです。河口堰閉鎖２３年を経て、全

国有数の産地であった赤須賀のヤマトシジミ漁は本当に厳しい状況に直面しています。

＊堰の工事開始 S63 年（1988） 堰閉鎖 H7 年（1995）徳山ダム完成 H20 年（2008）

赤須賀漁協「漁業操業状況調査結果」より

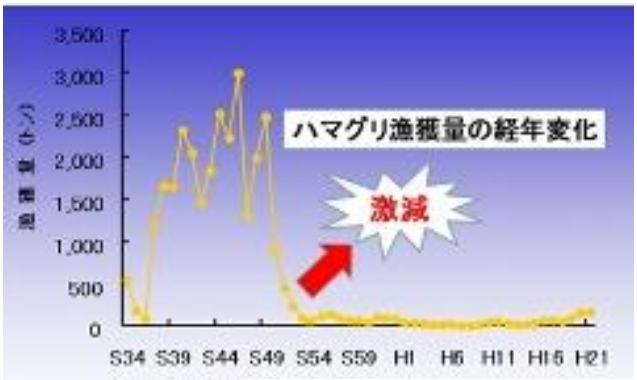


河川別漁獲量の推移（赤須賀漁業協同組合）

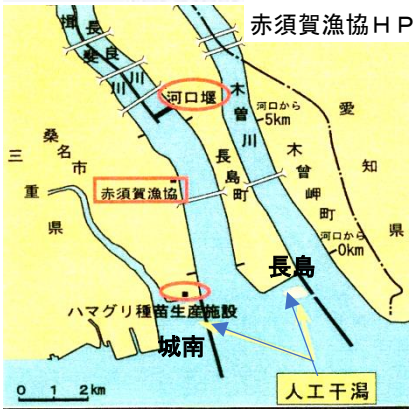
＊平成８年は平成８年６月から２月までの６か月分の集計結果

桑名市議会議員でもある伊藤研司さんは、こうした状況を年に一回は桑名市議会で質問をしています。三重県内、桑名市など地元でもほとんど話題になることがなく、市当局の回答も毎回同じだけれど、この問題が忘れ去られないようにと願って続けているそうです。

＊調査の様子などは ito-kenji.net で見られます。伊藤さんは 12 月 2 日の選挙で再選を果たされました



赤須賀漁協ＨＰ：akasuka-g. jp より



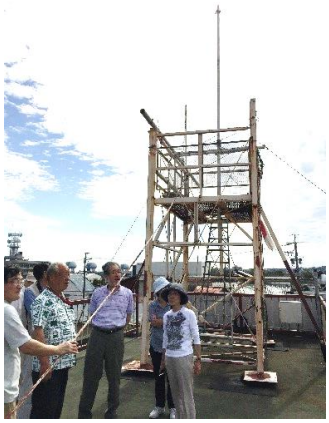
赤須賀漁協組合員数は 2018 年現在 137 人。シジミ漁に携わる漁師の数も大きく減ってきており、生活のためアルバイトをしている人も多いとか。こうした厳しい状況の中、若手を含む組合員は、河口部の長島沖・城南沖に河口堰建設に伴って出た浚渫土砂を利用して造成された人工干潟でハマグリ復活に活路をと頑張っておられます。漁協の長年にわたる種苗生産と稚貝放流事業の地道な努力により、水揚げは徐々に増えてきているそうです。岐阜や名古屋のスーパーなどでも、シジミに代わって三重県産のハマグリを見かけるようになりました。河口堰建設の当初の目的は現在全く使われていない工業用水利用でした。経済発展のためという大義名分に漁業者は大切な漁場をやむなく放棄したのです。私たちはそのことを忘れず、環境を少しでも改善するために、諦めずに、共に開門を求めていきたいと思います。

（報告：田中 万寿）

高潮被害と長良川河口堰の話を聞く

河口堰の危険性については、河口堰のすぐ東に住む加藤良雄さんからお話を聞いた。9 月 26 日は伊勢湾台風に襲われたくさんの死者が出た日ですが、加藤さんも被害にあわれ親族の方を亡くされています。この経験をふまえ河口堰建設が計画されて以来ずっと危険だと訴えてこられています。

伊勢湾台風では河口堰のすぐ上流にある国道 1 号線の伊勢大橋の支柱に高潮がぶつかり長島町側が破堤、水が流れ込んだ。加藤さんも流されたものの本当に運良く難を逃れることができたそうです。その経験があるので、伊勢大橋より太い河口堰の支柱を伊勢大橋すぐ下流に立てることにずっと反対してきた。



高潮や津波がぶつかって盛り上がった水が行き場を無くし、破堤したり堤防をこえたら長島町はどうなってしまうのか本当に心配され、個人で避難塔まで作られた。

その現場を見学させてもらった。加藤さん宅のすぐ裏にある水位記録伊勢湾台風の時はここまで水が来たそうです。

この経験を元に作った避難塔に食料などの備蓄も 1 年分ほどしているそうです。すごい準備ですが、あの伊勢湾台風でのたくさんの亡くなった方を埋葬した経験がそうさせてしまうのでしょう。

もう 1 つ心配しているのが巨大地震による破堤。加藤さんの駐車場横には柵がありますが、湛水によってこのフェンスの上部分まで河口堰上流には水があるそうです。この高さ（1.3m）まで常に水が溜めてあるとなると、大きな地震があったとき破堤する心配はないのでしょうか（ここは少し高くなっていて多くの住宅はもう少し低いところにある）。先日の北海道での地震被害の状態をみると長島町は大丈夫なんだろうか、加藤さんなどの個人の対策に任せてしまっていて良いのか、心配になってしまう。

今回のお話を聞いてみて思ったことは、加藤さんは経験から危険性を想定して訴えています。土木の専門家ではないかもしれません。だから裁判で危険性を訴えても建設を止められませんでした。でも訴え続けたことで最近の災害時によく使われる想定外という言葉は長島町では使えないということでした。

（報告：堀 敏弘）

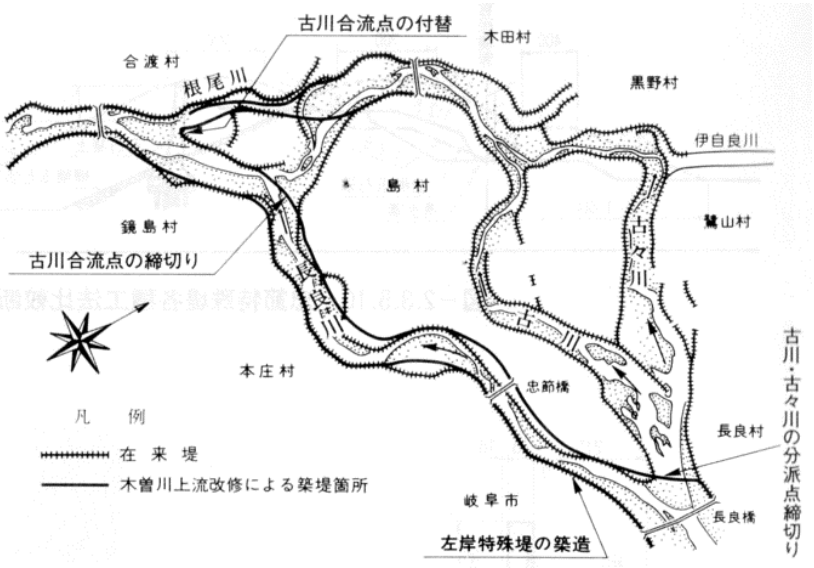
事務局から

・今年はタナゴを飼ってみたいから始まり、長良川流域の小魚の飼育にはまった。フナ、シマドジョウ、アブラボテ（タナゴの仲間）、カマツカなど 10 種類の魚たちがいる。たかが魚なのだが見ていると美しくかわいい。自分の川への関心は子どもの頃のここから始まったことにあらためて気づいた。長良川に関わるイベントに参加するときに、可能であれば連れて行きたいと思っている。子ども達に川の面白さが伝わるはずと信じている。　（堀　敏弘）

・今年の活動の中で特に印象的だった「導水路ツアー」。現場を見ながら説明を聞くことでイメージしやすく、よく分かりました。「導水路は山の中を通ることで用地買収が不要になる」ということで、コース選定の理由が分かりました。来年は下流域の違うコースで企画されます。今年荒天で見られなかった鵜飼いもセットです。岐阜県民としては双方に興味があり参加しようと思います。今年もありがとうございました。（中川　篤）

・むかし長良川が流れた旧古川、古々川地区は昭和１４年に締め切られ戦後は住宅地となりました。私はここに住んでいます。昭和５１年に伊自良川の右岸（西側）と鳥羽川北岸では浸水被害がありましたがエリアの内側は排水機場も徐々に整備され現在まで被害はありません。住民としてこれは昭和の河川行政の成果だと感謝をしています。河川行政の最大の目標は洪水から命と暮らしを護ることです。

　限られた税収の中、後世の人々から称賛される施策が行われることを期待します。（粕谷豊樹）



「木曽三川治水百年のあゆみ」ｐ258 より

・もう師走も半ば、本当に速い毎日です。年をとればとるほど、珍しい事がなくなり時の流れを速く感じるようになるといわれますが、今年は異常気象の自然災害、安倍政権の無茶苦茶ともいえる暴政、それに伴い人の心も荒れたか、誰でもよかった殺人、家族を手にかける・・、あおり運転事故の多発などなど、ビックリすることの多いなかの年末。本当に来年こそは良いことの多い年となる事を願います。皆様どうぞお元気で佳いお年をお迎えください！　（岡　久米子）

・子供の頃、お歳暮に丸い木の箱に入った桑名の貝新の時雨をいただくことがあった。炊きたてのご飯にのせた大きなハマグリの時雨は私の大好物！だった。今から思えば随分贅沢なご馳走だった。ハマグリの漁獲がその後急激に減ってしまったのと、私が生きてきた高度経済成長の年月が重なっていることをグラフを見て改めて知ることになった。（田中万寿）

・今年の長良川は洪水の連続で大荒れで、まだいろいろなイベントや観光にも影響しています。警報が出ると、上流の水位を見たり、河口堰が空いてるかなと情報を見ていました。テレビ愛知で河口から 70 キロ地点から同時にスタートして、どちらが先にたどり着くかという番組が放送されました。頭首工や河口堰があるため、乗り越えたり、くぐったり、流れが遅かったりで大苦戦してました。これも今の川の姿です。

（富樫 幸一）

・今年は、設楽ダム第二次訴訟原告団の共同代表となり、５月２３日に提訴し１１月２０日第１回口頭弁論でスタート。年明け２月６日第２回目です。（近藤睦美）

・１０月６日、久しぶりに徳山ダムを訪れた。完成から１０年、都市用水開発を主目的としたダムなのに開発水は一滴も使われていない。それでも毎年十数億の維持費がかかり、底には毒水が溜まっていく。2003 年に建設省（当時）は「撤退」（特ダムの場合は「ダム使用権設定申請権取下」）の際の負担金の算出方法を定めた。「もはや都市用水開発は必要ない」とわかっていたからである。「それでも造れ、というなら自治体の自己責任」と投げた。自治体（利水者）は独自の判断で事業から「撤退」できるのだ。徳山ダム導水路も今のうちなら撤退負担金は極小で済む。一刻も早く名古屋市・愛知県に「撤退」を決断をさせよう！

（近藤ゆり子）

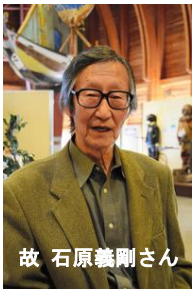
ご紹介

◆ 中日・東京新聞で３年間好評連載されたコラム「川に生きる」が書籍化されました。

新村安雄さんの川に対するつきることのない好奇心。川への視点を自由自在に動かし、川に生きる人々への深い愛情と優しいまなざしで、みたことのない川の姿を描き出しています。３０年前に長良川の源流から河口まで、車のチューブにつかまって泳ぎながら河口堰の問題を全国にアピールした新村さん。３０年間の思いがびっしり詰まった、彼にしか書けないすばらしい本です。是非川の魅力をご堪能下さい。

訃報

◆ 三重県の鳥羽にある「海の博物館」の館長の石原義剛さんが 9 月 17 日に 81 歳で亡くなられました。2016 年 1 月に四日市で行った、第一回の「伊勢湾流域圏の再生シンポジウム」では「伊勢湾の環境の今」という題で、歴史を振り返りつつ現在の課題について貴重な講演をしていただきました。「よみがえれ長良川」の呼びかけ団体にも加わっていただきました。深い感謝とともに、ご冥福をお祈りいたします。講演の内容は長良川学習会のホームページ dousui.org のニュース欄の 22 号に掲載してあります。ご一読ください。


故 石原義剛さん

鳥羽「海の博物館」

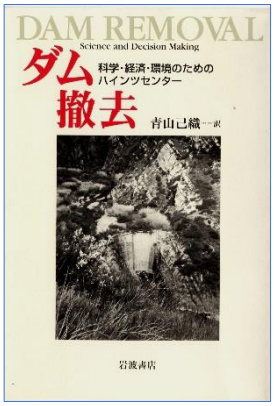
「よみがえれ長良川」実行委員会の参加団体を紹介しています。第５回は、いつも国際的な視野で活動を展開されている、「River Policy Network」さんです。

参加団体紹介 5

River Policy Network

事務局　高木 邦子

River Policy Network（R.P.N）は 2003 年から活動を行っています。当時、欧米諸国の河川政策は、持続可能な自然共生型へと大きく転換し、ヨーロッパでは氾濫原を取り戻す自然再生事業が、そしてアメリカではダム撤去が次々と進められていました。欧米諸国が先進的な政策を打ち出していった頃、日本でも『ダム撤去』（岩波書店）が出版され、RPN はこの本を通じて国内外の研究者や NGO と繋がっていきました。河川再生やダム撤去に関する海外の情報を日本全国に伝えるために、北海道や熊本など日本の各地で海外ゲストと共に国際シンポジウムを行ってきました。また、ニュートラルな立場から行政との“対話”を重視した活動も行ってきました。国交省の元河川局長やダムの管理者の方々に国際シンポで講演をしていただいたり、荒瀬ダムの撤去にむけて熊本の企業局や研究者の方達と、アメリカのダム撤去の視察も行いました。またインターネットの普及と同時に、川に関する情報をメールマガジンとして、国交省の関係機関、マスコミ、研究者、NGO、そして全国の読者の方々に配信してきました。最近ではアユをよみがえらせる為に、川の段差や堰を取り除く活動を、自治体や市民と共に行っています。



ご参加ください

1 月 13 日(日)1.13 命の水を守る全国のつどい・浜松
13：30～浜松市福祉交流センター ホール
浜松駅北 12 時出発で会場までデモ行進

1 月 24 日（木）2018 年の長良川・漁を振り返って
18：30～平工顕太郎さんの話を聞く会

2 月 3 日（日）伊勢湾流域圏の再生シンポジウム-IV
メディアコスモス「考えるスタジオ」
10:00～「国際会議の最新状況報告！」
13：30～シンポジウム

2018 年の長良川・漁を振り返って 平工顕太郎さんの話を聞く会

2018 年、台風と大雨の連続で大変な 1 年でした。
長良川は、魚たちは、漁はどうだったのでしょう。
川漁師の平工さんのトークを期待してください。

●1 月 24 日（木）pm6：30～
●ハートフルスクエアＧ中研修室
参加費 500 円
主催：よみがえれ長良川実行委員会

2 月 6 日（水）設楽ダム建設中止裁判（第二次）第２回口頭弁論　13:00～名古屋地裁

発行：長良川市民学習会
http://dousui.org/
代　表：粕谷志郎
連絡先：武藤　仁／090-1284-1298
〒500-8211　岐阜市日野東 7-11-1

● 私たちの活動は皆様のカンパで成り立っています。
賛同してくださる方は、ぜひカンパをお願いします。

ゆうちょ銀行口座：００８４０－３－１５８４０３
口座名称：長良川市民学習会